

83 海を渡った「IMARI」（伊万里焼）（2021年10月14日）

セーブル陶磁美術館、ギメ東洋美術館、パリ装飾芸術美術館など東洋の陶磁器を収蔵する美術館で、日本の陶磁器を見ることができます。この中には、17世紀に九州の有田（現在の佐賀県有田町）で作られた磁器があります。なぜ、フランスにあるいくつかの美術館で、日本の磁器を見ることができるのでしょうか。

磁器は中国で生まれたもので、その起源は9世紀頃に遡ると言われています。磁器は硬く、1200度以上の高温で焼成して作られ、磁器を作るための粘土にはカオリンという特別な鉱物が必要です。日本では、17世紀に朝鮮半島から渡来した陶工たちによって、磁器の原料となる良質な陶石が発見され、有田（現在の佐賀県有田町）で日本初となる磁器が誕生しました。この頃、日本は鎖国をしていましたが、オランダの東インド会社によって、有田やその周辺で作られた磁器はヨーロッパや東南アジアへ輸出されました。これらの磁器は、伊万里港からヨーロッパへ運ばれたことから「伊万里焼」（IMARI）\*と呼ばれました。

当時のヨーロッパではまだ磁器を作ることができなかつたため、日本や中国で作られた磁器をコレクションすることは、王侯貴族のステータスとなりました。高価な磁器は「白い金」とも言われて珍重されました。中国では17世紀半ばに起こった内乱によって陶磁器の輸出がほとんどできなくなりました。そこで日本がヨーロッパからの注文を一手に引き受けることとなり、伊万里焼の輸出が本格化しました。現在フランスの美術館で見ることができる日本の磁器は、このようにして海を渡ったものなのです。



17世紀前半に作られた初期の伊万里焼は、色付けは藍色のみの「染付」（そめつけ）というシンプルな図柄でした。しかし、17世紀半ば以降になると赤、青、黄、緑、紫といった複数の色を使った「色絵」が作られるようになりました。中でも人気を博したのが「柿右衛門様式」と言われるものです（写真）。乳白色の素地に、余白を残した絵画的な図柄で色絵を施すのが特徴です。

## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

しかし、17世紀の終わりになると、中国の陶磁器の輸出が再開し、伊万里焼は中国製品との価格競争に陥りました。そこで、職人の高度な技術を必要とし、手間とコストがかかる「柿右衛門様式」から、コストを抑えて量産化を図るために、金彩と色絵を用いた豪華な「金欄手（きんらんで）様式」の輸出に力を入れるようになりました。日本の富裕層向けに作られたものは主に食器でしたが、ヨーロッパ向けには室内装飾品として城や宮殿に飾るための大型の皿や壺が作られました。



伊万里焼（金欄手様式）、17世紀  
Japon, Imari(style *Kinrande*), 17e

有田で作られた磁器は、海を渡って IMARI の名でヨーロッパに知られ、ヨーロッパからの需要に応えるために更なる発展を遂げました。

\* 江戸時代に有田やその近辺で作られた磁器を「古伊万里」と言うのに対し、明治以降に佐賀県有田町で生産される磁器は「有田焼」、同県伊万里市で生産されるものは「伊万里焼」と称して区別している。現在でも有田と伊万里は、日本を代表する磁器の産地である。